

# メキシコ日本語教師会の歩み

## 1. メキシコ日本語教師連絡協議会結成以前 1970年—1989年

1960年代から1970年代のメキシコにおける日本語教育は継承言語としての日本語教育と外国語としての日本語教育に分けられるが、前者が日系の年少者を対象とし、1960年以前に始まったのに対し、後者は成人を対象とし、1960年代に始まった。エル・コレヒオ・デ・メヒコ (El Colegio de México) が日本研究修士課程の必修科目として1964年に、メキシコ国立自治大学が1967年に外国語教育センター (CELE) の自由選択科目として、又、日墨文化学院 (Instituto Cultural Mexicano Japonés)の前身の日本語講座も成人を対象として1967年に日本語教育を始めた。年少者を対象とする継承言語ではない日本語教育は1977年に日本メキシコ学院 (Liceo Mexicano-Japonés)が日本政府、メキシコ文部省公認の学校として発足し、幼稚園、小、中、高校生を対象とする日本語教育を始めた。

## 2. 設立までの流れ：メキシコ日本語教師連絡協議会（メキシコ日本語教師会）発足まで

現在のメキシコ日本語教師会の母体となるメキシコ日本語教師連絡協議会は1979年に3機関で始まった研究会を発端とする。これはコレヒオが客員教授として招聘した大阪外国語大学（当時）の大倉美和子先生が日本語のテキスト作成のたたき台を、コレヒオ、メキシコ国立自治大学、日墨文化学院の教師と一緒に検討するという形で始まった。それまでスペイン語を話す人たちのための日本語のテキストは世界に存在していなかった。

### 2-1 日本語弁論大会

日本語学習者の動機付けを目的として1981年に日本語弁論大会が発足した。年一回の開催で、国際交流基金の助成を受け（当初はメキシコに基金の事務所がなかったため、東京の国際交流基金に直接申請を行っていた）上記の3校が順番で主催した。その後、日墨文化学院が主催し、メキシコ日本語教師連絡協議会（後述）の教師が協力するという形をとって11回まで開催した。それ以降は各機関の代表からなる実行委員会を結成し、組織、運営を行った。最初の頃は、こじんまりとしたものであったが、次第に参加者が増えていき、場所も大使館の文化センターやメキシコ市の公共の施設を利用するなど、規模も大きくなり年々盛大になっていった。今年で33回目を迎える。

### 2-2 日本語教育の地方への広がり

1980年代後半には日本語教育機関が地方へも広がっていった。中部グアダハラ市ではグアダハラ自治大学、北部モンテレイ市ではヌエボレオン州立大学、北西部メヒカリ市にはバハカリフォルニア自治大学で日本語教育が始まった。

## 3. 1987年—2003年 メキシコ日本語教師連絡協議会

1987年にメキシコ市に国際交流基金メキシコ事務所が開所された。それ以前にも弁論大会への援助、講師による巡回指導など、国際交流基金によるメキシコの日本語教育への援助はいろいろあったが、メキシコ市に事務所ができたことにより、連絡が密になり、メキシコ日本語教師の活動も増えていった。

そのような中、1989年に基金メキシコ事務所の支援を得て、日本語教師の集まりである、メキシコ日本語教師連絡協議会（以下メ日教）が発足した。初代会長はメキシコ国立自

治大学、外国語センターに勤務していたロペス・ハビブだったが、数ヶ月で退任したため、栗飯原淑恵がその後を引き継ぐことになり、メキシコ国立自治大学の星野由美子が1998年に会長に就任するまで約8年間会長を務めた。

メ日教は日本語を教えている機関の日本語教師の集まりであり、規約なし、会費なしの非常に緩やかな組織であった。そのため、何かをするときにはその都度ボランティアを募り、組織、運営にあたった。

この期間のメ日教では上記の日本語弁論大会のほか、教師の質の向上をはかるための勉強会、日本語教育シンポジウムなどが企画、実行され、又情報交換、親睦を図るためのニューズレターが発行された。

### 3-1 メ日教研究会

はじめの頃は、日本語教育がほんのわずかな機関でしか行われておらず、日本語教育を専門にやってきたものがほとんど皆無ということから、月1回ぐらいの割合で勉強会を行った。日本語及び日本語教育について、テーマはいろいろだったが、そのうちの一つのテーマが、異文化に注意を払った日本語教育であった。テキストとして *Cultural Awareness. Barry Tomalin and Susan Stempleski, Oxford University Press 1993* を用い、毎回担当者を決め、担当者が担当のテーマの部分を読んで（原文は英語）、日本語の授業につかえるよう内容を紹介し、練習問題を作ってきて発表するという形式で、各校持ち回りで研究会を開いた。今、見てみると全部で70近い項目について検討したことが分かる。また、会によって参加者の多少はあったものの、1996年6月の勉強会では、メキシコ市の9校（上記3校のほか、日本メキシコ学院、日墨協会、ウナム・アカトラン校など）から17名の参加者があった。

このほかにもメ日教の有志（6、7人）が集まり、自分の研究テーマを発表し、それについて質疑応答するという勉強会も行われていた。

### 3-2 メキシコ日本語教育シンポジウム

もうひとつの活動の大きな柱が、日本語教育シンポジウム（当初は毎年、後隔年開催）の開催である。これは、地方の先生方には当時研究会の機会がなかったこと、またメキシコ全土の先生方の交流を深めようということで国際交流基金の援助を受けて、1990年に始まった。第一回目は、メキシコ市から1時間半ぐらいのケレタロ州のホテルで開催され、全員の研究発表が行われた。それまで日墨文化学院を中心として、一部の機関で取り入れ始めていたTPRの紹介があった。その後、新しい日本語教育、教授法、教材についてセミナーを受けたいという要望が多く、1991年の第二回シンポジウムを佐久間勝彦先生と江副隆愛先生をお招きし、保養地ココヨックで開催した。佐久間勝彦先生には「ヤンさんと日本の人々」、江副隆愛先生には「児童に対する日本語教授法」という題で講演していただいた。佐久間先生の「ヤンさんと日本の人々」は日本へ行った留学生が、日本でいろいろなことを経験していくというものであったが、日本到着からの日常生活が、簡単な文型を使っての自然な会話で描かれていて、日本へ行ったことのない学生にとって、日本語の勉強とともに日本を知ることのできる画期的なビデオ教材であった。先生方の講演のほか、我々の研究発表も行った。シンポジウム参加の条件は各自が講師の先生の論文を読み、レポートを出すという厳しいものだったが、その代わりに、国際交流基金の援助で宿泊費、食事、交通費など参加費は無料であった。

第三回のシンポジウムは1993年にメキシコ市のエル・コレヒオ・デ・メヒコで開催された。講師として、岡崎俊夫先生、市川保子先生をお招きし、「日本語教育におけるコミュニケーション・アプローチ」、「初級教材 *Situational Functional Japanese* とその使い方」というテーマでお話をしていただいた。このシンポジウムのために、開催の一年前から研究会で本を読み、討論を重ねたが、メキシコ全土から参加した約60名の教師が連日熱心に講

演を聴き、実習に参加し、討論に加わった。二回目と同じく、先生方のご講演と私たち教師の発表という2本立てであった。その記録が「第三回メキシコ日本語教育シンポジウム記録」という小冊子として残っている。

1995年にイスタパン・デ・ラ・サルで第四回目のシンポジウムが行われた。講師は縫部義憲先生で、「ヒューマニスティックな日本語教育」についてお話をしていただいた。イスタパン・デ・ラ・サルは温泉の出る保養地として有名なところで、夜の自由時間にゆったりと温泉につかった人も結構いたのではないだろうか。このときも教師の研究発表があり、又レポートの提出が義務づけられていた。

1997年に私の任期中最後となるシンポジウムがメキシコ北部のモンテレイ市、モンテレイ工科大学で開催された。このときはメキシコ市の研究会で勉強していた「文化の違いを意識した日本語教育」について話を聞きたいという皆の希望で、ノンネイティブとして日本語教育にご経験の豊富なネウストプニー先生をお招きして講演していただいた。このときも参加者にはレポート提出が義務づけられていたが、テーマにはかなりの幅がもうけられており、シンポジウムに即した異文化教育から、社会言語能力、メキシコにおけるイマージョンプログラムについてとか、言語教育と二重文化教育、また日ごろ日本語教育に携わっていて感じること、問題点等から書けるようになっていた。また、メキシコ市ではネウストプニー先生の「新しい日本語教育のために」という本をテキストとして4月より毎月一回勉強会を行い9月のシンポジウムに備えた。

### 3-3 ニュースレターの発行

メ日教の情報誌としてニュースレターの発行が1996年ごろ始まった。メ日教の定例会議、勉強会、日本語弁論大会、能力試験、機関紹介など日本語教育関係の情報が網羅されていた。

ここまでのまとめとして、1979年から1998年までの期間はメキシコにおける日本語教育の黎明期、成長期であったといえる。ほとんど全員が日本語教育の専門家ではなかったため相互の質の向上をはかるための勉強会、シンポジウムの企画、実行また、学生の動機付けのための日本語弁論大会など様々な活動が行われた。また教師が親睦を深めた時期でもあった。日本語を教える機関が増え、日本語学習者の増加とともに、日本人教師のみならずメキシコ人教師も増えていった。(文責：エル・コレヒオ・デ・メヒコ 栗飯原淑恵)

## 4. 日本語教師会設立の背景と経緯

3と重複する部分もあるが、教師会設立までの背景、経緯として重要な部分になるため、1990年以降の動向も含め、述べる。

1990年以降の日本語学習者・日本語教育機関の増加に伴って、特に地方への広がりが顕著となり、新人日本語教師、日本人や特に非母語話者教師も急速に増加し始めた。そこで、いくつかの地域でも有志の教師などによって勉強会が行われるようになった。その後メキシコ全国の日本語教育活性化と質の向上を図ることが必要となり、様々な活動を計画し始めた。メキシコ市ではこのメキシコ日本語教師会の前身である「メキシコ日本語教師連絡協議会」(メ日協)が1990年代初めから、元々規約がなく緩やかな日本語教師の集まり・勉強会といった主旨に基づいて運営されてきた。また、その当時メキシコ市に日本語教育機関が集中していたため、主にメキシコ市の日本語教育機関の教師が中心になって活動してきた。メ日協では日本語教育シンポジウム、メキシコ人教師のための夏期集中講座や日本語ブラッシュ・

アップコースなども始めた。しかし、メキシコ全国の日本語教育機関及び日本語教師のネットワーク形成はまだあまり成立していないのが現状だった。

そこで、その当時メキシコ全国の地域の日本語教育機関と日本語教師の増加に伴い、この現状を踏まえ、今後は各地域の教師も参加できるような全国的な正式な教師会の発足が望まれるようになった。2001年にカリフォルニア州立大学の當作靖彦先生をお招きし、「アメリカに於けるネットワーク形成の紹介」という講演もしていただいた。これもとても参考になり、この年のシンポジウムで全国規模の日本語教師会を立ち上げることに参加者の賛同を得、準備委員会が設立され、その後ネットワーク形成・日本語教師会設立までの2年の準備期間を設けた。準備会委員はメキシコ全国の各地域（北部、北西部、東部、中央部、首都圏）の代表から構成され、会議を重ねて社団法人のための教師会規約を作成した。

教師会設立と教師会の目的は以下の三つである。

- ① メキシコの日本語教育の質の向上
- ② 日本語教育の質を向上させることにより、メキシコにおける日本語教師の地位の向上も目指す
- ③ 日本語教育機関及び教師のネットワーク形成

これらの3本の矢を掲げ、2003年に2年の準備期間を経て、国際交流基金の援助のもと「社団法人メキシコ日本語教師会」が設立された。その当時の国際交流基金メキシコ事務所洲崎所長にも大変ご尽力いただいた。その時、メ日協会長であった星野由美子が引継ぎ、教師会の初代会長も務めた。

## 5. 教師会の活動

正式に社団法人として認可された教師会は様々な活動を開始した。因みにその設立当時の会員は100名程で、メ日協からの組織移行であったため、会員基盤もすでにある程度できていた。活動もメ日協時代から行われていたほとんどのものが引き継がれている。日本語教育シンポジウム、夏期集中講座、ノンネイティブ日本語教師ブラッシュ・アップコース、日本語弁論大会のほか、新たに国際交流基金メキシコ事務所発行のニュースレター「エル・パティオ」の教師会ページ、地域支部活動（勉強会、弁論大会、日本文化祭など）、ホームページの活用が挙げられる。日本語教育シンポジウムでは毎回日本から専門家を招聘して、会員である日本語教師が興味あるそして、授業に必要とされる教授法、文法指導、漢字指導、聴解指導、教室活動、異文化間コミュニケーション論、中・上級の教え方など様々なテーマで行われてきた。それに加え、メキシコの日本語教育機関の教師の日頃のクラスや活動実践報告、研究発表も行われてきた。

まとめとして、この教師会の設立は今後メキシコ全国の日本語教育機関と日本語教師の協力体制と連携を図る意味でもメキシコ日本語教育に重要だと考えられた。以上、述べたように、設立準備が始まった2001年から第一期理事会終了の2005年は、社団法人としての会計処理や法的義務など運営手続きの面で試行錯誤の時期であった。また、この時期は教師会としての組織やネットワークが飛躍的に発展していった時期と言える。

（文責：メキシコ国立自治大学外国語教育センター 星野由美子）

## 6. メキシコ日本語教師会設立

ここからは、教師会設立以降の活動の内容や目的について述べる。教師会の設立目的は前にも述べたように以下の3点である。

メキシコ日本語教師会設立目的の3本柱

- ① メキシコの日本語教育の質の向上
- ② 日本語教育の質を向上させることにより、メキシコにおける日本語教師の地位の向上も目指す
- ③ 日本語教育機関及び教師のネットワーク形成

基本的に教師会の活動はこの3つを達成するために行われてきた。

### 6-1 メキシコに於ける日本語教育の質の向上

メキシコに於ける日本語教育の質の向上の為にはメ日協の時代から引き続き、シンポジウム、夏期集中講座、勉強会などを行ってきた。

シンポジウムは、日本やアメリカの大学の先生方を招聘講師としてお招きし、日本語教育に関する最新の情報や動静をお話して頂いてきた。つまりシンポジウムではアカデミックな講演を聴き、教師たちの日本語教育の知識を深め、それによって日本語教育の質の向上を達成することを目指してきた。

それにひきかえ、夏期集中講座ではすぐに授業に役立つような教授法や教案の書き方、教材の作成などをテーマにして講座を行ってきた。

このような形でそれぞれの活動の棲み分けを行ってきたつもりである。

また、各地方での日本語教育の活性化を図るためにそれぞれの地域で勉強会が行われている。この活動にも教師会からの補助もあり、国際交流基金の日本語教育アドバイザーからの指導も戴けるようになっている。勉強会の他にそれぞれの地域での弁論大会も活発に行われるようになり、日本語教育の各地域での活性化に大きく貢献していると思われる。もちろん、全国のメキシコ日本語弁論大会も教師会の大切な行事の一つであり、この弁論大会は教師会法人化の前の1981年から行われていて、毎年、実行委員会が結成され、その実施に携わっている。

ノンネイティブ教師のためのブラッシュアップ講座も日本語教育の質の向上のための一つと考えている。1997年にモンテレイで行われたシンポジウムの招聘講師であったJ. V. ネウストプニー先生が現地の先生が育っていないようであればその国の日本語教育に将来はないと仰ったことを重く受け止め、メ日協の時代から現地の先生の育成を大きな目標としてきた。最初のうちは地方の教師への日本語コースは難しかったため、首都圏部の教師を中心に文法、読解などの日本語ブラッシュアップコースを開催した。しかし、インターネット環境などのインフラが少しずつ整ってきた中で、インターネットを活用し、地方の教師をも対象としたコースを行うことが可能となった。そこで、インターネットを使用しての作文講座、会話講座等が行われてきた。これらのコースはノンネイティブの日本語教師の日本語力そのものを向上させることを目指していたが、同時に、講師、チューターとして参加する教師会の会員である日本人教師がその指導に当たり、普段の授業であまりすることのなかった指導を経験することによって、双方にとっての勉強の場となることを目指してきた。

このように教師会の活動の大部分がこの日本語教育の質の向上を図るためのものであるが、いずれもメキシコ日本語教師会が設立されてから始められたものではなく、メ日協の時代からメンバーが心に掛け、目指してきているものを行ってきたものである。

その間、日本への留学生や研修生の日本語学習経験者の増加、ある時期を境に日本語能力試験 N2 受験者数が飛躍的に伸びたことはメキシコに於ける日本語教育の広がりやレベルが向上してきていることを示すものであると言え、教師会の活動がその一端を担っているならば設立目的に少しでも近づきつつあると言えるのではないかと思う。

### 6-2 日本語教師の地位の向上

このシンポジウムや夏期集中講座のお知らせを各機関の日本語セクションの長に出し、会員である日本語教師にシンポジウム参加の便宜を図っていただくことをお願いすると同時に、メキシコ日本語教師会やそれに所属している教師たちが行っている活動を認識してもらえよう努めてきた。

しかし、日本語教師の地位の向上という点においては、その待遇など働きかけることはまだ多くあり、教師会の活動としては十分とは言えず、これからの課題であろう。

### 6-3 日本語教育機関及び教師のネットワーク形成

教師会の運営はメキシコ全土を5つの支部に分け、各支部から代表を出して行い、各支部でも活動を活性化してきた。また、インターネットを用いたブラッシュアップ講座を通じて、支部を越え、会員間のつながりが築かれ始めている。また、シンポジウムには、中南米地域からの参加も増えてきており、徐々にネットワークがメキシコ国内だけではなく、中南米にも広がりを見せてきている。さらに、2011年からは、ネットワークのさらなる強化、充実を図るため、国際交流基金のさくら中核の助成を受け「サイト構築プロジェクト」が開始された。これにより、2008年から活用されていた教師会ホームページをより内容を充実させ、活用していけるようになりつつある。 (文責：日墨文化学院 穂積和子)

## 7. 教師会の今後の展望と課題

現在の教師会は勉強会から始まり、メ日協時代に築かれた土台の上に、重要視されていた活動がそのまま移行、実施されている。教師会設立の目標を振り返りながら、これからの展望と課題について考えたい。

### 7-1 メキシコ日本語教育の質の向上とネットワーク

シンポジウムや夏期集中講座は日本語教育・教授法の知識を得、日々の授業に反映させることができ、その結果、教育の質がよくなり、レベルの高い学習者を輩出でき、その役目を果たしていると言える。

質の高い日本語教育を維持するには、その教育を担うノンネイティブ教師の日本語力アップが不可欠である。シンポジウムや夏期集中講座が2、3日という短期に対し、作文講座、会話講座などの「ブラッシュアップ講座」は3、4ヶ月継続して行い、ノンネイティブ教師の日本語力の向上が期待できる。実際に飛躍的に伸びた実例がいくつかある。

また、これらの活動は質の向上にとどまらず、それを行うためにした小さな活動がネットワーク形成の強化によい結果をもたらしている。以下のその活動を述べる。

- ・シンポジウムにおけるグループワークによる、作業。

- ・シンポジウムのポスターセッションにおける会員の機関での実践報告と質疑応答。
- ・短期集中講座におけるノンネイティブ教師や経験の浅い教師による発表。
- ・ブラッシュアップ講座にチューターを担当し、他地域の会員とのやりとり。

以上の活動の他、5年間続いた「サイト構築プロジェクト」に支部代表として参加。築かれた繋がりから支部日本語弁論大会の審査員として別の支部から会員が参加などが挙げられる。

このような活動によりメキシコ国内の会員との間には細い根がしっかりと根付いてきた。今後、このメキシコ国内で形成されたネットワークを維持し、さらに強化しながら、外にもネットワークを広げていくことが重要である。

## 7-2 教師の地位の向上を目指して

現在、メキシコの正式教育機関である高校、大学などで雇用の際に、日本語教師養成講座を終了していることや修士号を取得していることが問われることが多くなってきた。すでに授業を担当している教師が休暇を取り、日本で長期の研修を受けることはできない。それで、教師会として「教師養成講座」を開設することを考えてみたらどうかと提案する。すでに、メキシコ国立自治大学外国語教育センターではこのコースがあり、今後、話し合い次第では、タイアップして講座を開設することが可能ではないかと考える。

## 7-3 教師会の財政面

年々国際交流基金の助成金が減り、上記の活動を行う際にも教師会の資金を回さなければならなくなっている。このままでは数年後には教師会を運営していくことは難しくなるだろう。第5期理事会中部支部では寄贈が受けられるように活動を行ったが、結果的にはそれは不可能であった。社団法人としての制限の中で、寄贈が受けられるような方法を探す、スポンサーとして教師会行事に協力してもらおう企業、団体を探すなど、独自に収入の道を考えることも必要ではないか。インターネットを利用した教師会の会話講座、作文講座はかなりの成果を上げてきている。この講座で培われたノウハウを利用し、外部に向けた日本語オンライン講座なども視野に入れることができるのではと思う。

## 7-4 理事の仕事

教師会の仕事はメ日協時代からずっとボランティアで行われてきている。しかし、理事の仕事量がある時期から非常に多くなり、今やボランティアの域を超えているため、理事の仕事の見直しをする時期になっているのかと思う。また、理事会が2年任期で交代する際、理事経験がない会員だけで新しい理事会が形成されることが多い。そのため、複雑化する理事会の運営内容を正確かつ効率よく引き継ぐ方法も考えていかなければならない課題だと思う。

(文責：ヌエボレオン州立大学 直井恵理子)